【中編① 嫉妬勃起NTR（月読の村編）】水泳部エロマネ彼女 ～男性は下半身裸が義務の村

大学二年の三月。

水泳部の追い出しコンパが終わった夜、如月壮太は有紀のアパートのベッドで、天井を見つめていた。

隣で小さく息を整えている森井有紀の体温が、腕の下に伝わってくる。

彼女の髪から、わずかに酒と、他人の精液の匂いが混じって漂っていた。

壮太は目を閉じ、この二年間を思い返した。

主要人物

如月壮太

大学二年。水泳部所属。

幼馴染の有紀と、小学校の水泳教室からの付き合い。

中学で一度別れ、高校で再会し、大学で再び恋人になった。

部内では関係を隠し続けていたが、二年の夏に公表。

彼女が他の男に触られ、他人棒を咥え、挿入される姿を目の前で見てしまうたびに、激しい嫉妬と同時に抑えきれない興奮を覚えるようになった。

自分でも認める「寝取られ気質」の持ち主。

森井有紀

大学二年。水泳部選手兼マネージャー。

壮太の幼馴染であり、恋人。

清楚な顔立ちに、水泳で鍛えられたしなやかな体を持つ。

部の「伝統」に流されながらも、徐々にそれを受け入れ、時には自ら積極的に動くようになっていた。

壮太の性癖を理解した上で、彼を煽る言動を取ることもある。

本編

壮太は有紀の髪をそっと撫でた。

二年間で、二人の関係は確実に歪んでいた。

それでも、離れる気はなかった。

むしろ、この歪みがなければ、今の二人はここまで深く繋がり合えていなかったかもしれない。

「……壮太」

有紀が小さく呟いた。

まだ寝入っているのか、夢の中で彼の名前を呼んでいるのか。

壮太は「ああ」と短く答え、彼女を抱き寄せた。

この夏、何かがさらに変わることを、まだ彼は知らなかった。

第1章　意識が落ちる前

大学三年の夏休みも終盤に差し掛かった八月下旬。

水泳部の夏合宿が終わったあと、壮太と有紀は二人だけで、少し離れた山間の温泉地へ一泊旅行に出た。

表向きは「疲れを取るため」。実際は、追い出しコンパ以降、互いに言葉にできないものを抱えたままの関係を、少し整理したかっただけだった。

到着したのは、小さな古びた旅館。

夜、二人は温泉に入り、部屋に戻ってから控えめに体を重ねた。

有紀は以前より敏感になっていて、壮太もそれを感じ取っていた。

行為が一段落したあと、有紀は壮太の胸に頬を寄せたまま、静かに口を開いた。

「……壮太。私のこと、どう思ってる？」

「好きだよ」

「それだけ？」

有紀は少し体を起こし、暗い部屋の中で彼の目を見つめた。

「私が他の人に触られたり、されたりするところを見て、興奮してる自分のことも含めて、好きって言ってるの？」

壮太は黙った。

有紀は待たずに、さらに言葉を続けた。

「二年生の忘年会の二次会、覚えてる？　私が他の男のちんぽを入れて、腰を動かしてるの、壮太はちゃんと見てたよね。顔、真っ赤だった。でも、下はすごく硬くなってた。自分でしごいてたのも、私見てたよ」

「……」

「追い出しコンパのときもそうだった。私が先輩たちのを口で扱ってる横で、壮太はテーブルの下で我慢してたでしょ。嫉妬で苦しそうな顔してるのに、目だけは熱かった」

有紀は指先で壮太の胸を軽く撫でながら、声を落とした。

「ねえ、正直に言って。

私が他の男にされてるところを見ると、どんな気持ちになるの？

辛くて仕方ない？　それとも……見ていないと、物足りない？」

壮太が答えられないでいると、有紀はさらに記憶を掘り起こすように続けた。

「一年の新歓コンパも、覚えてるでしょ。

拓海先輩に胸を揉まれてるの、壮太は斜め前からずっと見てた。グラスを握る手が震えてたの、私にはわかってた。

八月のスクール水着の宴会のときもそう。先輩の大きな手でおっぱいを形が変わるくらい揉まれてるのに、壮太の目は逸らさなかった。むしろ、熱かった」

「……有紀」

「忘年会の一次会で、私が先輩の股間を布の上から揉んでるの見てたときも。

壮太、ビキニの中で限界まで硬くなってたよね。隠そうとしても、形がはっきりわかった。

あのとき、私が『先輩の精子、かかっちゃった』って言った瞬間、壮太の顔がどうなってたか、覚えてる？」

有紀はゆっくりと顔を上げ、真正面から壮太の目を見た。

「全部、見てたでしょ。

私が他の男のちんぽを扱って、咥えて、入れて、出されてるところを。

そのたびに、嫉妬で苦しそうな顔をしながら、下は正直に反応してた。

ねえ、壮太。

あのときの気持ち、今も続いてるの？

それとも……もっと、深くなってる？」

壮太は天井を見つめ、長い沈黙のあと、掠れた声で答えた。

「……両方だ。辛くて、吐き気がするくらい嫌なのに。見てる自分が、興奮してる。

前より、たぶん……強くなってる」

有紀は小さく息を吐いた。怒っている様子ではなかった。むしろ、どこか納得したような、静かな表情だった。

「そうなんだ」

彼女は再び彼の胸に顔を埋めた。

「わかった。無理にどうこうしようとは思わない。

でも、壮太がそういう気持ちで私を見てるってこと、ちゃんと覚えておくね」

その言葉の語尾に、わずかに混じっていた甘い響きを、壮太は聞き逃さなかった。

翌朝。

朝食のあと、二人で旅館の裏手にある遊歩道を歩くことにした。

道は途中から細くなり、古い石段が続く。

その石段の途中に、小さな祠があった。

苔むした鳥居の奥に、古い石の社がひっそりと建っている。誰も参拝している様子はなく、 神聖な空気だけが漂っていた。

有紀が「なんか、神聖な感じがするね」と呟いた直後だった。

雨上がりで足元が悪く、壮太の足が滑った。

バランスを崩した彼は、祠の前の大きな石に後頭部を強く打ち付けた。

鈍い音がして、視界が真っ白になる。

有紀の悲鳴が遠くに聞こえ、そのまま意識が落ちた。

第2章　村へ

気づくと、壮太は立っていた。

足元は土混じりの道。周囲は深い緑に囲まれた山あいの集落だった。

古びた木造の家が点在し、遠くに小さな神社のような建物が見える。

空気は湿っていて、どこか懐かしいような、それでいて明らかに日常とは違う匂いがした。

自分の服装は、旅行で着ていた私服のままだった。

頭の痛みも、出血の跡もない。

「……ここは？」

声に出して呟いた瞬間、後ろから声をかけられた。

「壮太」

振り返ると、有紀が立っていた。

彼女も現実と同じ服装のまま。でも表情が、どこか落ち着いているように見えた。

「有紀……？　今、転んだよな？　俺、頭を――」

「わからない。気づいたら、ここにいた」

有紀は静かに答えた。

「ここは『村』みたい。

人もいるし、ちゃんと生活してるみたいよ」

壮太は周囲を見回した。

明らかに現実の山間の温泉地ではない。

それでいて、有紀がここにいることが、妙に自然に感じられた。

「どうやって戻るんだ？」

「わからない。でも、とりあえず話を聞いてみよう」

有紀はそう言って、先に歩き出した。

壮太は一瞬ためらい、それでも彼女の背中を追った。

頭の奥で、何かが静かにざわついているのを感じながら。

第3章　月読の村

有紀の後を追って歩いていると、まもなく小さな広場に出た。

そこにはすでに何人かの村人が集まっていた。

女たちは普通の服を着ている。ワンピースにカーディガン、シャツにスカート。現代のどこにでもいそうな服装だ。

しかし男たちは違った。

上半身はTシャツを着ている者もいれば、完全に裸の者もいる。

問題は下半身だった。

男たちは例外なく、何も身につけていなかった。

ちんぽが、そのまま外気に晒されている。隠す素振りもない。歩くたびに軽く揺れ、立って話をしている間も、ただ無防備に垂れ下がっている。

壮太は思わず足を止めた。

一人の中年の女性が、二人に気づいて近づいてきた。

年齢は四十代半ばだろうか。艶のある肌に、落ちついた色気をまとっている。薄手のブラウスにロングスカート。腰のラインが柔らかく強調されていた。

「外から来たのね」

声は低く、穏やかで、どこか甘い響きがあった。

「ここは、どこなんでしょう？」

有紀が先に答える。壮太は視線を泳がせながらも、周囲の男たちの股間から目を完全に逸らすことができなかった。

「ここは『月読の村』よ。外とは少し、決まりが違うの」

女性はそう言って、軽く微笑んだ。

「まずは休みなさい。宿泊するところは用意しておくわ。詳しい話は、今夜の集まりでする」

そう言って彼女は手を振り、別の村人に何か指示を出した。

壮太と有紀は、案内された小さな木造の家に入った。

簡素な造りだが、清潔で、布団も敷いてある。

扉が閉まると、壮太はすぐに有紀に向き直った。

「おかしいだろ、ここ。男が……下、何も穿いてない」

「……壮太も見た？」

有紀は窓の外を見ながら、静かに言った。

「私も見てた。隠そうともしてない。普通に歩いて、普通に話してる。

この村、男は下半身を晒しているのが当たり前みたい」

壮太は唇を噛んだ。

有紀がそれを「見てた」と素直に認めたことが、妙に胸に引っかかった。

「戻る方法を探さないと」

「そうね。でも、今は従うしかないみたい」

有紀はそう言って、布団の上に座った。

その仕草が、どこか落ち着きすぎているように見えた。

夜。

村の中央にある集会所のような建物に、二人は呼ばれた。

すでに多くの村人が集まっている。女たちは普通の服、男たちは下半身を完全に晒したまま座っている。

先ほどの美熟女が、前に出て口を開いた。

「今夜は、外から来た二人に、この村の決まりを伝えるわ」

静かな声だったが、場の空気がわずかに緊張した。

「この村は、女が主導するの。男は下半身に何も身につけない。それが義務よ。

隠すことは許されない。堂々としていなければならない。

上半身は自由だけど、下半身は常に晒しておくこと」

壮太は息を飲んだ。

有紀は黙って聞いている。

「月に一度、『測定』がある。

男の身体は隠すべきものではない、という考えからよ。

公開の場で全裸になり、長さと太さ、勃起したときの状態を測られる。

女がそれを見て、評価する。古くから続く、男を品定めするための習慣なの」

場がどよめくでもなく、村人たちはただ当然のように聞いている。

「最も大きな決まりは『月の儀式』よ。

選ばれた女は、神前で他の男たちと交わる。

彼女に彼氏や旦那がいる場合も、例外ではない。男はそれを見ていなければならない」

壮太の顔から、血の気が引いた。

有紀の横顔を見ると、彼女は唇を軽く噛み、目を伏せていた。

美熟女は二人を交互に見て、続けた。

「外から来た人には、最初から強制はしない。拒否することもできるわ。

でも、ここに長くいるなら、いずれ気が変わるかもしれない」

静かな言葉だった。

壮太は拳を握りしめた。

頭の奥で、何かが熱く疼き始めているのを、はっきりと自覚していた。

つづく